

英語トートロジーの意味と機能

村尾, 治彦
九州大学大学院文学研究科 : 修士課程

<https://doi.org/10.15017/6787012>

出版情報 : 九大英文学. 34, pp.187-204, 1991-12-02. The Society of English Literature and Linguistics, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :



英語トートロジーの意味と機能*

村 尾 治 彦

0. はじめに

トートロジーは、論理的に同語反復的であり、聞き手の知識になんら新しい情報を与えないようである。ところが、(1)のような発話は伝達の意義がある。

- (1) a. Boys will be boys.
- b. War is war.
- c. Business is business.

このようなトートロジーを説明するのに、従来主に二つのアプローチがなされてきた。一つは、Levinson (1983) にみられるように、語用論の立場を取るもので、もう一つは Wierzbicka (1987) によって主張されている意味論的アプローチである。そしてさらに Fraser (1988) による、上の二人とは異なる、トートロジーに使われている名詞にたいする“共有知識”という観点から分析するものもある。

本稿の目的は、それぞれの理論に基づき、トートロジーの本質を探究することである。第一章では、先行研究とその問題点を吟味する。第二章では、トートロジーの具体例を上げ、その意味が固定されたものでなく、様々な発話の文脈によって変わっていくことを提案する。さらにトートロジーの機構を分析し、トートロジーとは何であるかを明確にするために、その含意がどのようにして生じるかを見ていく。第三章では、トートロジーの談話機能に

焦点をあてる。

1. 先行研究の考察

1. 1. 語用論的アプローチ [Levinson (1983)]¹

Levinson は、Grice のトートロジーへの解釈を引き継いだ形で、トートロジーが伝達意義を持っている事がいかに明白であるかを、Grice の「協調の原理」の量の原則の違反という観点から説明している。彼は次のように述べている。

... Since this (the maxim of Quantity) requires that speakers be informative, the asserting of tautologies blatantly violates it. There, if the assumption that the speaker is actually co-operating is to be preserved, some informative inference must be made. (Levinson 1983 : 111) (カッコ内は筆者)

Levinson は例えば、次のような例文を上げて意味をつけている。

- (i) War is war. [=terrible things always happen in war, that's its nature and it's no good lamenting that particular disaster]
- (ii) Either John will come or he won't. [=calm down, there's no point in worrying about whether he's going to come because there's nothing we can do about it]
- (iii) If he does it, he does it. [=it's no concern of ours] (p. 111)

彼はこれらにたいして、次のように述べている。

Clearly these share a dismissive or topic closing quality, but the details of what is implicated will depend upon the particular context of utterance. (p.111)

しかしながら、Levinson 自身も“War is war”のような例に関しては、比較的文脈に依存せずに伝えられうることを認めている。

1. 2. 意味論的アプローチ [Wierzbicka (1987)]

Wierzbicka は、Levinson の解釈に反論し、この現象は、Grice の会話の原則では説明出来ず、この表現自体にいかなる文脈にも影響されない固定された意味があり、下位範疇ごとに別々に意味を記述していく必要があることを述べている。会話の原理で説明できない理由として、このような表現は他の言語、たとえば、フランス語あるいはドイツ語などにおいては、英語のように理解出来ないか他の解釈をされることをあげている。例えば、フランス語の“Les garçon sont les garçon” {(The) boys are (the) boys} やドイツ語の“Knaben sind Knaben” (Boys are boys) などは、解釈しえないし、ポーランド語の“co x to x” (What is x is x) は、「Xには独特の優れた点がある」という意味を表し、英語のそれとは異なっている。したがって、トートロジーは、普遍的会話の合意では説明出来ないとしている。代わりに、彼女は名詞的トートロジーの3つの下位範疇を次のように提示し、それぞれに意味をつけている。

- (i) N. abstr is N. abstr a sober attitude toward complex human activities and negative aspect

War is war. Business is business.

- (ii) N. hum. pl and N. hum. pl tolerance for human nature

Boys are boys. Women are women.

(iii) (ART) N is (ART) N obligation

A rule is a rule. The law is the law. (p.105—108)

(筆者により多少修正)

したがって、このパターンにあてはまらない*“Wind is wind”、*“Sneezing is sneezing.”、*“The war is the war.”などは、非文としている。また、? “Sadists are sadists.”や? “Nazis are Nazis.”は、上記の(ii)のパターンにあてはまるが、その振る舞いがあまりにも悪いので寛容できないために理解出来ないとしている。

Wierzbicka はこのように、パターンによって下位分類し、構文ごとに意味を付けていく方法を取っている。しかしなぜこの形式が「寛容」、「義務」、「ありのままの態度」などに分類出来るのか述べられていない。

1. 3. Fraser (1988)

Fraser は、トートロジーは基本的には文脈に依存してはいるが、結局発話関与者の名詞にたいする共有知識によってその意味が決定されるべきだとして、次のような一般化を定義している。

An English nominal tautology signals that the speaker intends
that the hearer recognize:

- (i) that the speaker holds some view towards all objects
referenced by the NP;
- (ii) that the speaker believes that the hearer can recognize
this particular view;
- (iii) that this view is relevant to the conversation (Fraser
1988: 217)

Fraser は、上記の性質から、Wierzbicka によると非文となっている“Wind

is wind”、“A bottle is a bottle”、“Peace is peace”なども妥当だとしている。さらに Fraser は、(3)、(4)、(5)の例を上げて Wierzbicka の一般化を否定している。すなわち、その意味が彼女のパターンの形式に合わないからである。たとえば、(3)と(4)の場合“War is war”や“Politics is politics”における形式は破ってはいるが、「a sober attitude toward complex human activities, inevitable negative aspect」という定義された意味にあてはまるし、(5)のばあいはその逆である。

(3) Negotiations are negotiations.

(4) A deal is a deal.

(5) Love is love.

またこのような解釈にたいして Wierzbicka は、トートロジーの名詞には意味論的制限があり、例えば次のように、NP will be NP の形式は生物ではない名詞とは共起できないと主張している。²

(6) * Trees will be trees.

1. 4. 問題点

先行研究をこれまで見てきたが、まだいくつかの問題が残されており、トートロジーの本質は明らかにされないでいる。

まず Levinson に関して、トートロジーの意味は文脈に依存していると主張しているが、どのような文脈で、どのようにその意味が産出されるのか言及していないことがあげられる。

次に Wierzbicka を考える。彼女は一見うまく分類しているように思われるが、非常に限られた慣習的なトートロジーの名詞しか取り上げてないで、どの程度その分類化が妥当であるかはっきりしないし、どのように意味ができたのか説明されていない。また、“A rule is a rule”のような (ART)

N. is (ART) N. に関して、その形式は義務を表すと言っているが、その論理形式ではなくその名詞自体が義務を表すのであってパターンにあてはまっているからではない。

(7)の例を見て見よう。Wierzbicka は、自分の理論に矛盾したことを言っている。

(7) A husband is a husband.

彼女はこの文に 4 つの意味を上げてはいるが、(7)には 1 つしか論理形式を出していない。彼女の理論によると、もし 4 つの意味を付けるとすると、それにあたる論理形式も 4 つあるはずである。

したがって、根本的な問題は全ての文法的予測が可能かどうかである。

最後に Fraser を検討していく。彼の「共有知識」の理論は妥当のように思われるが、彼の論文にもいくつか問題点は残されている。まず、Wierzbicka がトートロジー内の名詞の制限が意味論的な事にあると主張しているのにたいし、Fraser は語意内容に制限があるとしている。しかしながら、どちらも十分とはいえない。その「制限」というのは意味的制限に「共有知識」が加えられるべきものである。例えば、“Wind is Wind”において、話者と聞き手に“wind”という名詞にたいする共通した見解があり、出来上がった文が意味論的に妥当であれば解釈されうるのである。

このように、上で言及してきた問題を解決するために新しい理論あるいは説明が必要とされる。それを次章で提案する。

2. トートロジーの意味

この章では、トートロジーの意味をくわしく見ていくが、名詞的トートロジーに限る。

2. 1. 文脈からの分析

トートロジーの多くは、ある特定の文脈において理解される。そこで、語用論を考慮に入れざるをえない。

初めに、原則的に文脈に依存するトートロジーの意味を考えてみよう。

“Business is business”に Wierzbicka は 1 つの意味しか上げていないが、異なった文脈では異なった意味をもっているのである。次の例を見てみよう。

- (8) [社長が部下に A 氏は例の仕事をうまくやっているかと尋ねると部下は A 氏は今シカゴで講演をやっていると答える (自分の仕事をしないで)。これにたいして社長は:]

社長: . . . X'mas is over and *business is business*, keep on buying. Dilute the son of bitch. keep on buying. [Wall street] (movie)

これは、「クリスマスはおわった。仕事に専念しろ。慈悲はやらんぞ。」という意味を表し、ビジネスの厳しさを伝えている。次の例を見てみよう。

- (9) [テロリストに捕らえられている人質の 1 人が助けを求めて、テロリストのボスと交渉をしているところである。]

人質: . . . *Business is business*. You use a gun, I use a fountain pen. What's the difference? [Die Hard] (movie)

これは、「ビジネスはみな同じだ。あんたは銃を使い、私はペンを使う。たったそれだけの違いだ。だから我々は理解しあえる。交渉しようじゃないか。」という意味を表し、ビジネスの性質はみな同じであることを伝えている。“Business is business”の最後の例を見よう。

- (10) [マーガレットという少女が弟をつれて、母の使いに行っている場面である。お金を払った後で、彼らは顔なじみの店主としてしばらく話をし、帰ろうとすると、店主はお金をみな返しながら、言う。]

店主：Oh, Margaret, your change. *Business is business.*

Margaret：Thank you. [Love is never silent] (movie)

これは、「サービスだからお金は受け取らないよ。だが、これもビジネスだ、受け取りなさい。」ということを示唆している。

明らかにこれらの例はそれぞれ異なった意味を持っている。次に、“Boys will be boys.” のケースを見ていくが、これも同様に文脈によってその意味が変わってくる。

- (11) [教室で紙飛行機を飛ばしている子どもたちに先生は注意すると、子どもたちは言うことを聞こうとしない場面で先生は：]

先生：*Boys will be boys.*

これはこの文の一般的な意味である。すなはち、「少年は腕白なもので、注意してもしかたがない」ということを示している。我々はふつうこの文をイデオムとして捕らえ、1つの意味しかないように思われている。しかし、文脈によってはいくつかの意味が出てくるのである。次の例を見てみよう。

- (12) [子どもが母親に、子どもには難しい仕事をさせられるが、やはりその子には出来なかった場合：]

Mother：*Boys are boys.*

この意味は、「やはり彼にこの仕事をさせるには幼すぎた。だがこれもしかたがない」ということを示している。このように、イデオム度の高いトートロジーでさえ文脈によっては意味が変わってくるのである。

(13)の例もまた普通は理解されにくい、次のような文脈の中では可能となる。

(13) A : This table is beautiful.

B : *A table is a table.*

これは、「テーブルは単にテーブルで、ただの家具にしかすぎない(たとえばあなたが何かすばらしいものとして感じていても)。」という意味を表す。

同様に(14)の例を考えてみよう。

(14) [たとえナチスがほんのささいな事しかしてなくても、会話参加者がナチスにたいして悪い印象を持っている場合、次のように言える。]

人々 : *Nazis are Nazis.*

この意味は、「結局ナチスは悪いことをしてかす奴等だ。」と解釈できる。最後に、普通はあまりなじみのない別の例を見てみる。

(15) [母親がニューヨークへ発つ息子にニューヨークに住んでいる叔父さんの電話番号を渡している場面]

母親 : Take this. It's Uncle Howard's phone number in New York.

息子 : I've got an uncle in New York?

母親 : My cousin Ellen was married to his half-sister's nephew before she got bit by that dog and died. . . . He is

still kin and *kin is kin*. [Martin Owens *The Secret of My Success*]

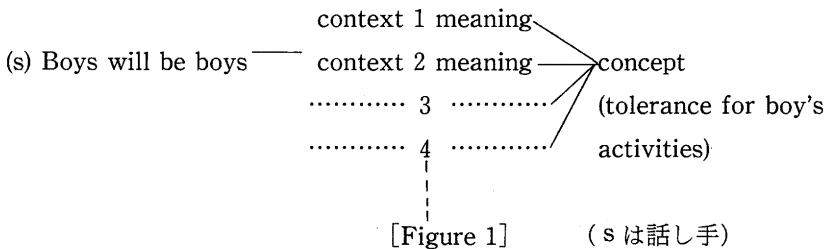
これは、「直接の親戚のエレンが死んで、ハワードは直接の血筋をひいてはいないが、それでも彼は義理の叔父さんだよ」という意味を表している。

このように、文脈なしには理解できない、あるいは文脈によって含意が変わってくるトートロジーを見てきたが、以上のことから、トートロジーの解釈は文脈と密接に結びつき、その含意を言及するには先行研究のように文脈から離して考えることは無意味であることが分かった。

次節では、このようなトートロジーの含意がどのようにして産出されるのかを考えていく。

2. 2. トートロジーの機構

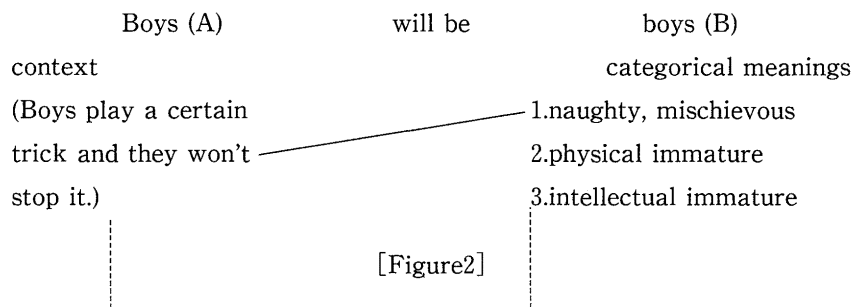
トートロジーを理解すべく機構は2つの分析図を用いて説明できる。それは、どのようにして含意が理解され、どのようにその含意が文脈と関係しているかを示すものである。まず、図1をみていく。



より明確に、図1はトートロジーの意味がどのようにしてとらえられるかを示している。すなわち、話者が“Boys will be boys”と発話すると、その場に適した文脈に結びつけられる。そしてその文脈によって異なった含意が選択される。しかしながら、その各含意は、「少年の行動にたいする寛容」という共通姿勢を伝える。この共通姿勢が図1の“concept”（概念）に相当する。

したがって Wierzbicka によるトートロジーの一般化はこの「概念」であり、いかなる文脈においても、固定された意味を持つことになる。Wierzbicka は、誤ってこの「概念」をトートロジーの意味と捕らえ、トートロジーの意味は文脈に依存しないと主張していたが、含意された意味は 2, 1. で見たように文脈によって変わりうるのである。結果として、トートロジーの意味は文脈に依存するのである。

次に、図 2 を見ていく。



この図はどのようにして特定の含意が生じるかを示している。トートロジーが発話される時は話者と聞き手がその名詞への共有知識を持っていることが想定される。具体的には、話者と聞き手共にこの場合、少年が一般的に腕白であることを知っている場合である。この図において、「Boys (A)」は指示的用法があり、当の文脈で話者と聞き手が話題にして話している少年を指す。一方、「boys (B)」はより抽象的な範疇内の意味を指す。また、図 2 に見られるように、範疇内の意味はあらゆる文脈において固定されていない。的確な意味の選択は Grice の会話の原理の「関連の原則」³ に基づき、為される。例えば、ここでは的確な意味として「腕白」が選ばれる。

したがって、話者と聞き手が範疇内の意味を共有していれば、トートロジーは容易に理解できる。しかしながら、会話参加者が共有している範疇内には意味が産出されることはない想定できる。⁴

ここで、上で議論してきた機構に基づきながら次のケースを説明してみる。

(16) A : I think we all understand your real motivation here,
vera.

B : I admit that I felt some attraction toward Brantly at
the first. But *love is love* and *business is business*.

[Martin Owens, *The Secret of My Success*]

この例において、話者は「愛」は「愛」の範疇に属し、けっして「ビジネス」の範疇には属しないと主張している。つまり、「愛」と「ビジネス」は別ものだとしている。

上の理論によると、トートロジーは原則的に文脈に依存するが、あらゆる文脈において範疇内の意味が1つしかないケースや、1つの特定の文脈がたいていの場合に固定されてしまった場合がある。そのような場合には、その1つが非常によく使われるために文脈の効果がうすれ、文脈なしでも理解されうる。結果として、1つの意味しか残らず原則は破れる。したがって、そのようなものは Wierzbicka の言うイデオム化になるのである。

前者のケースは、次の例で提示される。

(17) War (A)	is	war (B)
context		categorical meaning
(One says : This war is	———	1. terrible, tragic,
good war... 1)		disastrous...
(... 2)		
(... 3)		

これは、文脈はたとえいくつあっても、使われる範疇内の意味は1つであるということを示している。

後者のケースは、先にみた(11)の例である。さらに、Wierzbicka によると解釈できない“Wind is wind”などは、会話参与者に名詞にたいする共有知識があれば、意味を成すようになる。

以上の分析から、トートロジーの機能を次のようにまとめることが出来る。

- (i) 文脈条件：ある特定の文脈で言及される名詞の結びつけられる意味と共有される範疇内の意味との間にギャップがあれば：トートロジーは、結局問題の名詞は他の何ものでも無く、その名詞の範疇に属するんだという含意を引き出しながら、ギャップをうめる働きをする。
- (ii) 文脈条件：ある特定の文脈で言及される名詞の結びつけられる意味とその範疇内の意味との間にギャップがなければ：トートロジーは、問題の名詞を同定し、話者と聞き手がその意味を確認する働きをする。

次の例は文脈条件(i)を表わすものである。

- (18) A : This war is a good war.
B : War₁ is war.₂

Aが言及している「戦争」は聖戦であるのにたいし、Bの「戦争」は戦争の「恐ろしい、悲劇的」という範疇内の意味を指している。Bは、話者が言及している「戦争」₁も「戦争」₂という範疇に属しているんだという含意を引き出すことによってギャップをうめている。

文脈条件(ii)の例は(11)にみられる。ここでは、文脈上と選択された範疇内の意味上のどちらの「少年」も「腕白」なという意味を持っている。お互いの間にギャップはないので話者は単に確認をしているだけである。

ここでもう一度 Levinson と Wierzbicka の問題点を振り返ると、彼らの問題は上の理論で解決されるであろう。例えば、“War is war.”のようなトートロジーは図2で見たように、範疇内の意味が1つしかないということから説明出来るよう。

Wierzbicka の「パターンによる一般化」の理論があらゆるトートロジー表現を補えるかという問題に関しては、彼女の説明出来ない文を我々のアプローチで補え、それらの文もある文脈では解釈されうることを明確にする。ま

た、Levinson が言及してないトートロジーの含意の産出過程を提示した。

3. 会話のストラテジーとしてのトートロジー

第二章で見てきたように、トートロジーは2つの機能をもっている。すなわち、「ギャップをうめる働き」と「確認」である。この章ではこれらをもとに、トートロジーの談話機能を議論していく。

まず、談話終結タイプがあり、その中には説得機能と回避機能が含まれる。説得機能は「ギャップ」をうめて話者と聞き手の見解を一致させ、説得する機能である。その結果、話題は打ち切られる。次の例をもう一度見てみよう。

(20) shopkeeper: Oh, Margaret, your change. *Business is business.*

Margaret: Thank you. [= (10)]

明らかに、文脈の「ビジネス」といわゆる「ビジネス」と呼ばれているものとは異なっている。なぜなら店主はお金を受け取らなかったからである。これも同様に、ギャップをうめることによって説得しているのである。

次の例もまた説得機能の例である。

(21) Mother: Take this. It's Uncle Howard's phone number in New York.

Son: I've got an uncle in New York?

Mother: My cousin Ellen was married to his halfsister's nephew before she got bit by that dog and died . . . He's still kin and *kin is kin.* [= (15)]

文脈中の「おじさん」は母親と息子で一般的に考えている「おじさん」と異なっている。しかし、トートロジーを発することで説得しているのである。

回避機能は、会話から逃げることを意味する。すなわち、話者が説得しよ

うとしてるが、できないので無理やりギャップをうめることによって会話から逃げる時に用いられる。次の例を見てみよう。

(22) A: What's love?

B: Love?, well, ah. . .

A: Well, tell me what's love.

B: Ah, *love is love*.

これは、Aの質問にBは答えられないので会話から逃げている場面である。

このように、談話終結タイプには、説得機能と回避機能がある。

次に談話要約タイプをみていく。このタイプは要約機能と確認機能を含んでいる。

確認機能は名詞の性質が何であるか確認する機能である。なぜなら2. 3. で見たように、ギャップが生じない場合にトートロジーは確認機能をもっているからである。次の例をみよう。

- (23) 「たとえナチスがほんのささいな事しかしてなくても、会話参加者がナチスにたいして悪い印象を持っている場合、次のようにいえる。」 [=14]

Nazis are Nazis.

話者は、文脈上と範疇内の「ナチス」はどちらも悪漢であると思っているのでギャップはない。だから、話者はただ確認しているだけである。

確認機能のもう一つの例を見てみよう。

- (24) 「教室で紙飛行機を飛ばしている子どもたちに先生は注意するが子どもたちは言うことを聞こうとしない場面で先生は:]

先生: *Boys are boys.*

これもギャップがないパターンで、先生が単に、少年はやはり少年の性質を持っているものだ、と確認しているだけである。

要約機能は名詞の性質を確認したあとで、会話全体を要約する働きである。次の例を見てみよう。

- (25) 「戦場で捕虜の少女を兵士が殺した。彼は言い訳をするが、結局彼の行動は殺人ということになった。このとき周りの者達が言う：」

Even in war, *murder is murder*. [Casualties of war]
(movie)

このように、英語の名詞的トートロジーの談話機能を、2つの下位機能を持つ2タイプに分けて分析してきた。これらの機能は各文脈において重要な役割を果たす。トートロジーは今まで文レベルで考えられてきたが、ここで見てきたように、その本質を見極めるためには、談話レベルで分析することが重要である。

4. 結び

本稿ではトートロジーの性質を議論してきた。まず、第一に、1章で先行研究を振り返り、その問題点を指摘した。

2章では1章で取り上げた問題を解決するために文脈的分析をした。その結果、トートロジーの意味はたいがい固定されたものでなく、様々な文脈によって変わってくる、あるいは一般的にではないが、ある特定の文脈で発話されるものもあることがわかった。そしてトートロジーと文脈の強い結びつきを強調した。

さらに、トートロジーの機構を議論した。その含意がどのようにして生じ

て、どのように文脈と関わっているのかを2つの機構図を用いて明らかにした。そういった議論からトートロジーの本質を引き出し、「ギャップをうめる働き」、「確認」の2つの機能を発見した。

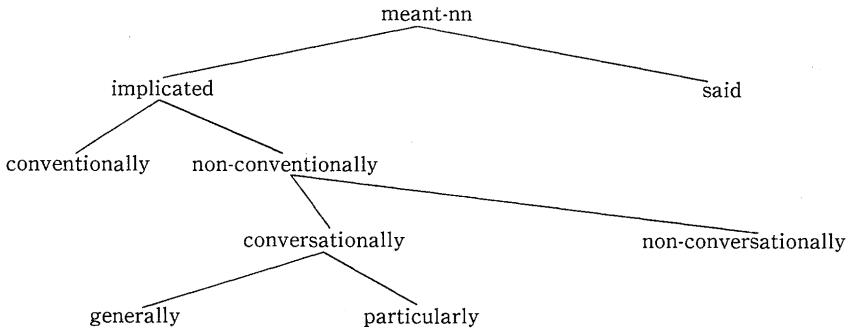
3章では談話機能に焦点をあて、談話終結タイプと談話要約タイプの2つにわけた。前者は説得機能と回避機能を持ち、後者は要約機能と確認機能を持つ。これらの機能は日常生活において非常に重要である。

こうして議論してきたのだが、まだ問題は残っている。他のトートロジー表現を吟味しなければいけないことだ。すなわち、“If he does it, he does it.”のような文的トートロジーの分析である。ここでの理論がそれに適応できるか確認する必要がある。

註

* 本稿を執筆するにあたり、貴重な教示や助言を頂いた稲田俊明先生に感謝の意を表したい。

1. Levinsonによると、含意の種類は次のように分けられる：



2. Wierzbicka は Fraser にたいして、反論した論文を出しているが、ここでは扱わない。

3. Levinson (1983) は Grice の関連の原則を次のように提示している：Make your contributions relevant. . . In other words, “make an utterance befitting the occasion. ここでは、この原則に従うと、もっともその場に関係のある意味が選択されるのである。

4. なぜ右の名詞がその名詞の範疇的意味を表すかという点、Predicate nominal の性質をもつからである。研究社の新英語学辞典によると、動詞の後の名詞は名詞ではなく、形

- 容詞の働きを持ち、その主語の名詞がどのような性質を持っているか表すのである。
5. 出典のでていない例文に関しては、ネイティブチェックをしている。

参考文献

- Fraser, Bruce. 1988. "Moter oil is moter oil: An account of English nominal tautologies". *Journal of Pragmatics* 12: pp.215-220.
- Fukuchi, Hajime. (福地肇) 1987. "伝達機能からみた BELIEF - CONTEXT" 英文学研究 Vol. 64, No. 2. pp. 265-279. 日本英文学会.
- Grice, H. P. 1975. "Logic and conversation". (*In Syntax and Semantics, Vol. 3*), by Peter Cole & Jerry Morgan (ed.), pp. 41-58. New York: Academic Press.
- Higuchi, Mariko. (樋口万里子) 1988. "トートロジーの意味理解". 活水論文集、第31集、pp. 167-186.
- Levinson, Stephen. 1983. *Pragmatics*. Cambridge: University Press.
- Sato, Nobuo. (佐藤信夫) 1986. レトリック、記号 etc. 創知社。
- Seto, Kenichi. (瀬戸賢一) 1988. レトリックの知。
- Wierzbicka, Anna. 1987. "Boys will be boys: 'Radical Semantics' VS. 'Radical Pragmatics'", *Language* 63 (1), pp. 95-114.
- Wierzbicka, Anna. 1988. "Boys will be boys: A rejoinder to Bruce Fraser" *Journal of Pragmatics* 12, pp. 221-224.
- Yasui, minoru. (安井稔) 1978. 言外の意味. Tokyo: Kenkyusha.